

思い出すままに

小 嶋 稔（地球物理学教室）



私が、理学部に助手として採用されたのは、1961年の10月ですから今からほぼ30年前になります。休職者のポストにと言うことで採用手続きと同時に、年月日を空欄にして、“一身上の都合により……”という退職願も提出したのを覚えております。助手になりたての頃の3号館界わいは、地球物理の木造の建物と地震研究所の分室があるばかりの草原で、午後には殆んど毎日みんなで草野球に興じたものでした。草の中に転がったボールを捜しているうち蛇と鉢合せしてびっくりしたり。蛇と言えば、つい昨年にも3号館裏の人通りの多い通路で、優に2メートルもある青大将を見かけましたが、まさかあの当時の生き残りではないでしょう。あの頃の地球物理学教室は、講座制のもと、教授の権威は大変なものでした。でも、67年の秋の地球物理教室で起きたロックード事件はこうした家父長的な教室の雰囲気を一気に吹き飛ばしてしまいました。事の起こりは、ロックード社の社員を研究生として教室に入れようとしたことから始まりました。当時はベトナム戦争の真っ最中でした。ロックード社はベトナム戦争を陰で支えた有力な軍事産業の一つです。教室の全院生が殆ど一人の脱落者もなく一週間ストライキを貫徹しました。こうして件のロックード社員には因果

を含め国に帰って貰い、挙げ句には教室の全教授、助教授が地球物理院生自治会に自己批判書を取られて一件落着と言う次第でした。この自己批判書は、後日学生自治会の手で、全学に配布され、かくいう私も、赤門で手渡されたのを覚えております。しかしこれが一年後全国に広がることになった大学紛争の前奏曲になるとは、当時夢にも思いませんでした。大学紛争は、東大在任中でもっとも強烈な印象を受けた事件でした。図書館前で数千人もの××系とか〇〇系とかの人々が互いに棍棒と竹竿とで殴り合いする風景は、まさに地獄絵図そのものでした。見ていて憤りと悲しみで体の震えが止まらなかったのを覚えております。学生も教官もへとへとになって殆ど一年を費やした東大紛争とは、一体何だったのか、今でもよく分かりません。紛争の後東大はさして変わったようにも見えませんが、でも地球物理教室に関しては大きな変化があったように思えます。学園紛争も収まりそしてまたアメリカ軍もベトナムから引き揚げ、さらに一昨年にはベルリンの壁の撤去と、世界は全く新しい時代に入ったかの観がありました。これでようやく世界から戦争が無くなる時代に入るのかなと言う期待も束の間、1月17日以降の出来事は、私の希望を微塵に砕くものでした。この先の戦争がどのような結末に向かうのか、しっかり見届けてやろうと思っています。4月からは、阪大で宇宙地球科学科の創設のお手伝いをする予定です。そして、少し時間に余裕がでたら、去年からやりかけている石炭からダイヤモンドを造る仕事に、決着をつけたいと思っています。30年間理学部の皆様には公私共々、大変お世話になりました。